

小田基先生のこと

言語文化教育研究センター長 板垣 完一

かつて小田先生と私は10年ほど職場を共にしました。そのうえ、先生が定年をお迎えになるまでの6、7年間は研究室が隣り合わせでした。しかし、研究分野が違ふことや世代が離れていること、所属部局の所帯が大きかったことなどのためか、先生と身近に言葉をかわすことはほとんどありませんでした。先生は、定年退官と同時に私の視界から消えて行きました。その先生がふたたび私の世界に現れたのは、確か3年後でした。

平成9年4月11日午前10時頃、「お願いがあるので、昼過ぎ研究室にお邪魔したいが」という電話を先生から頂きました。全く予想外の人物の、しかも短か過ぎて用件の内容が推測不可能な電話でしたので、大きな戸惑いと不安を感じながら待っておりました。部屋に入っていらっしゃった先生は、椅子にかけのなりすぐ、私を岩手県立大学の英語担当教員に迎えたいと思っているが、と切り出されました。その後、簡単な説明を頂いたような気がします。が、ことの唐突さに何を質問したものかとおろおろしているうちに、先生は「資料を置いていくので、質問があったら遠慮せずに訊いて下さい」といい残し、スーッと帰って行かれました。電話と同様、簡潔で直裁な面会でした（後日、「あれは予想通り予想外の申し出で、本当に困りました」と先生に話したところ、聞き流しておられました）。

その後の幾多にわたる先生との接触はだいたいこのようなものでした。これらを通して感じたことは、物事を伝えるに際しての先生の基本的なスタンスは、「簡にして要」ではなかったかということです。先生は、相手に対してこのことを実行なさるばかりか、自分に対してもそうしてくれることを喜ばれたように思います。「くどいやりとり」を嫌っておられたと思います。先生は、「簡」のところをあれこれ問い正したり、「要」の部分を理解できなかつたり身勝手に解釈したりする相手をひどく苦手としておられるように見受けられました。私は、このようなスタンスは、究極的には「人間を信じる」というところから来ていたのではないかと推測しています。この点をもっと確かめ、その信念の由来を教わりたかったという思いでいっぱいです。

平成12年6月30日、先生はその朝一時退院されたばかりで昼まで静養しておられたとのことでした。お部屋に上がって行くと、さっそく文書の入った袋を取り出して、「これを預けるから」とおっしゃいました。中身がセンター関連文書であることはすぐ分かりました。私はそれを普通に受け取りながら大学の様子を話しました。先生には病気の影響でほとんど聞こえないことは承知していましたが、いたたまれない気持ちから口走ってしまいました。そのときのことを思うと心が騒ぎます。それから、ご家族と一緒にお昼を頂き、先生のお宅を出ました。これが最後となりました。

私は、先生とは平成9年4月11日に初めてお会いし、平成12年6月30日にお別れをしたと考えています。この短かい出逢いと別れの中に先生と共有した多くの事柄があります。短い故にはっきりと刻み込まれた記憶を大切にしつつ、これからの我が身を励ましていきたいと考えています。

最後に、先生からのメッセージの一部を引用します。この文章をたどるとき、私には先生のあのやさしい顔が思い浮かび、穏やかな肉声が聞こえてきます。

言語文化教育研究センター構成員 各位（1999年1月6日 センター長 小田 基）

明けましておめでとうございます。

昨年4月の開学以来そろそろ1年目が終わろうとしています。着任に当たっては大変良い環境に恵まれていることに感動を覚え、一年間を振り返る時期に当たっても、それがずっと続いております。ここまでこられたのは、ひとえにセンター構成員の皆さんのお陰です。これだけ皆の気持ちが一致している集団を、県立大学の中で、初心を忘れず、一層前進させたい物です。とりわけ大学という専任の職場が初めての先生方も既に十分に大学の機能・習慣に習熟され、なお一層の意欲を燃やして下さることを念じます。